会長講演

小児科医の可能性と小児医療の明るい未来について
–小児科医は小児医療をどこまで飛翔させることができるのか–

横田 俊平（横浜市立大学医学部小児科）

小児医療全体が、いまほど変革を求められている時代はないかもしれません。変革とは内なる発意の下で構想されるものでなくてはならず、同時に小児医療に拘わるすべての参画者がそれぞれの立場で考え、また時間軸を自由に行き来できるものでなければならないと思います。

今回の学会では、大学小児科の主催者が会頭を務めることの意義を明らかにすべきであると考え、会頭講演の時間を戴きました。大学小児科の役割はまず医学生・研修医の教育にあります。また未解明の疾患や病態について研究室での研究の推進、適切な治療法の樹立に寄与する役割も重要です。協力病院とのダイナミックな協働研究も含まれます。さらに広域の地域小児医療体制の構築・改変についても責任が生じてきました。とくに教育は、大学ではこれまである種の subspecialty 専門教育に偏る傾向があり、例えば子どもの発育・発達、栄養、common diseases、予防医学など総合的な小児医療について疎かになっていなかったか反省が求められます。これまで外来小児科学会医師達が打ち立ててきた概念、すなわち「アドヴォカシー」であれ、「プライマリ・ケア」であれ、子ども全体を受け入れるところから病気との闘いが始まるという概念が教育の核になっていなかったことが問題とされているのだと思います。一方、小児の総合医療だけでは重篤な疾患の子どもは助けられず、専門的な知識・技術を磨くことにより質の高い医療を子どもに提供することも小児科医の役割です。したがって小児総合医療と subspecialty 専門医療との結合が必要で、そのシステムをどう作るかが今後の課題です。この点は、小児救急医療でも小児科医の集約化による拠点病院構想でも基本に流れていなければならない事柄です。

この講演では、教育を核とした新しい小児医療体制の構築について、さまざまな角度から検討したいと思っています。「育てよう、探求心の芽！広げよう、協働の輪！吹かせよう、小児医療の風！」とは、すなわち私たち小児科医一人ひとりが、病気の子どもを目の前にして思わず口にする病気との闘いに向けた「出陣の合い言葉」であろうと考えています。